

薙花行

小笠原秀實

六

心を清風の輕きにたぐへ、身を白雲の浮べるに譬へむには、我あまりに重く、絡りを現實に繋ぐ。風雅はた醜きものゝ前に眼を閉するすべにしもあらず、好むものに溺れて憂を遺るにしもあざれば、我が思ひあはれに又限りなし。捨て難き我が世の悩みを懷き、離れ難き遊心のあこがれをさすれば、身は瓢兮として放たれたるが如く、心なかなかにつながれて物の如し。怪しき我が命の行路をあやなしてある日は秋山を探り、併せて秋風を送るも、解け難き心の姿、何をか我が譬にはせむ。

南勢の山間、大石驛の前、車を離れ、こぼれちる日の滴を受けて我が立ちたるは、一九二七年十一月三日、慣れざる我が旅を傷はりて扶け導く若き人々の影に、我が眼、涙を含む。

黄金なす平野の、山々に狭まりて成れる高原の底を縫へる流、水多くして清きを櫛田川と云ふ。

雲さへも遮らむとする幾百尺の崖下、激湍を走らせ、碧潭をたゞへ、白砂を敷く。山角迫らむとして潤け、綠樹黝からむとして又紅を照る。百歩を刻み、又百歩を刻む。岩々に名を讀み、瀬々にその心を汲む。聳ね立つ石壁の前端、石柱に裂け、危く落ちむとして僅かに何れの底にかつながら。齊戒して年ごとに注連繩を張ると云ふもまた人の心なり、百足蘭とていと稀なる草のこゝにのみ残るとて惜まる。

又百歩を行く。道に沿ひ、そゞり立つ崖を背にして不動院あり。堂宇の薨梢に競ふ。棕の木の年古り

て大なる瘡を擔へど快げに枝を大空に張れる、木葉黃に染まり、一枝は伸びて鐘樓を撫で、秋の魂を冷き金鐘に語らむとす。若し夕暮の響を聞かば、我も亦袂を濡すべき旅人の姿なるをや。門なく扉なき寺なれば、一すじの清流をたのむで結界とし、石の姿よきを撰むで僅かに堺と彫る。もとより無門の關なれば、人は秋風の如く淨界にくるべし。數歩を踏めば岩壁高く聳わて頂を知らず。岩根に沿ふて廻れば、水高く岩にかゝつて煙を飛ばす、不動瀧なり。藤の蔓低く垂れて染め來る色、白き水を彩る。

瀧壺にかゝる藤の葉黄色して水の心を秋に彩る

瀧を我がひとりのものにしたらむがごとき客舎に呼ばれ、窓を押しして飛水を見れば、勝景すべて我のみに集る。瀧水と峽嵐と、主あるにあらざれども、暫しは我になすむで我がものと名け齊きぬれば、うれしさはてしなし。瀧に背き、欄に凭つて遙かに對山を望み清流に臨む。濃き緑の黒める杉の林全山を罩め、處々に霜樹を飾つて客心をもてなし、高く秋空に聳わつらなりて天地を劃る。峰の頭圓く、紡錘に高まれる姿、我が心に適ふ。水底の巨巖、玻璃を透すが如く、清澄今何にかたぐへむ。

玉をぬく糸の如くに水伸びて景色景色をつなぐ一すじ

白き水浴びて洗へるこの里の石にもさへや似ぬ命かな

客舎を出て佛殿に賽し、岩角をよじ、また山壁をつとふ。菊清香をこぼし、龍膽紫に染めて秋晩の光を吸ふ。

山菊は如何にゆらぐと石に凭り日ざしを浴びて我れ風を待つ

老杉の根に踞して眸を放てば、打ち廣がれる田の面、秋の日の恵みにあふれて涙ぐまし。何ことのお

はしますかを知らず、たゞ實り來る心のかたじけなさ、我にのみ湧き上る涙としもは思ほへず。

あたゝかき日さしを浴びて稻の田の實る心よ涙ぐまるゝ

この里の人々と農耕のなりはひを語り、ゆかめられ行く山住の明日を思ひ憐れまむとて川のほとりを廻り、山の胸に長く伸びたる學舎には來ぬ。

歸去來の詩人は西疇にことあるを聞き、幻住の旅人は猪鬼の災に心興じたりしも、今は過ぎし日のはかなき夢とはなれり。壯者たすきを離れ、老翁よるべきを失ふ。苗を東阜に種き、生て阡陌に滿つるも汗して取れるものは膳に上らず。桑麻成り來つて眠らず紡げども、その衣を織らず。すべては影の如く消れて疲れたる土と病める腕とを殘す。藁に履を編むも銅錢の一つに價せず、桑葉に露を浴ぶると雖も繭、屑の如し。一錢を得ては十金を失ふ。美しき家なきにあらざれども、都の富加はる様に較ぶべきにあらず。よき米を薄き布に換へ、鮮蔬の香はしきを、欺き偽られて、粉脂の虚榮に賣る。南山壽を樂しむと雖も、悠然として誰か望まむ。東籬の菊、露を含めども誰か爲めに佳辰を迎へむ。力を量つて故轍を守るも、寒と飢とに堪ふる由なし。生の行休を感じ、夫の天命に疑ひなきを得るもの、今あわれ田園の何處にかある。故園既に蕪したり。何れかよく清新を拓かむ。

たゞ思ふ。人の手もて荒されたるものは、又人の手もて修むべし。自然と人間とのよきもの、いかでかこの荒蕪を許さむ。よき心もて固き礎石の上に、改め建て築くは、人間に價ひするものゝ、たゞ一つの行路なるをや。これを知らば近きこと掌の如く、知らざれば渺沍煙霧の裡に隠る。切れば脆きこと癩布の如く、切らざれば堅きこと金石の如し。道遠きにあらず、これを思へばすなはちこれ。ひたぶるに

すべての心に正しきもの、生れ来る日こそ、初音待つ侘びしさにもまして待たるれ。

窓を洩る半輪の月に人の姿を照らし、山峽の暮秋に人間苦を傷ましむるも、あわれかことのすさびにはあらず。月影を踏むで一度別れ、月影を踏むで再び集り、一夜、同愁のうれしさに語る。子づれの猪來つて稻の實を食ひあらず様も、山里なればとて、心いと杳かなり。

山溪の夜はわけても静かなり。月雲に薄れ、闇、水に曝されて微光かすかに動く。枕に依れば水聲耳を洗ひ眼を閉づれば、流水思を潤す。ある時は響音我に異ならず、ある時は響音我の彼方にひやく。一と異と結んで解けず。幻想の如く、假有の如く、又實在の如く斷想の如し。何をか我が心の常とはせむ燈火を拂つて夢なき虚無の玄洞には眠る。

二

明くれば微雨虫の吐く糸の如くに光る。雲遠き山々をそめ近き峰に己が姿を描く。昨日の白風影を收め、重き潤また新しき心を流す。紅葉のうるむで垂れ下れる、縁樹の頻りに霧を吸へる、石ごとごとく濡れ、砂かすかに曇る。たゞ清風のみ惑はずその一路を磨く。瀧の水に口を漱けば、木の葉洩る滴、頂に落ち、岩に觸るれば苔冷やかに命を驚かす。

崖のかなた、古く立てる木の黒くうつろに裂けてあはれなり。

大なる木の根うつろに破れたりひそかにこもり我雨を聴く

人訪はぬ瀧に落葉のする朝を我が手つばめてあわれさを掬む

清愁に堪はず雨を着て溪流を探る。細塵浮ばざるも我を軽くす。子持岩は子石を脊に負ひて秋雨にそぼち、赤岩は代赭に黒むで縁水をはむ。岩の名様々に残さるゝも、名なきもの、名あるものにもさへやましてあわれなり。

橋多き山路はうれし越ゆるたびあわれ幾重の白雲の人

つゞく山駱駝の脊山紡錘の山我れ白雲に包まれし山

柿野は大石の上流なり。常徳山につゞける形よきいと大なる山の峰高きが、遠く裾を擴げ、はて斷崖に落ちて我が清溪を圍む處、曲折して清潭となり、巨岩或は立ち或は臥し、長石と呼ばれ、はかり岩と名けられ、又兜岩烏帽子岩等と呼ばる。形態すべて人の思にまかす。あるものは大なる半圓の輪形を畫きて碧水を圍み、或るものは方形を重ねて樓臺を寫す。又洞門を象つて清流をひき、虹梁にうねつて影を水面に走らす。造型の格調この二境につゞひ集り、姿態の清裝悉く群つてこゝに思ひを交はす。雜岩すべてこの諧調に加はり、凡石悉く自性のまゝにこの大化を助く。何事の喜びぞや。すなはち笠と履を捨て、巨岩の一つに這ふ。野茨の實珊瑚に照り、野菊さびしさに命をせめ、柳枯葉を飛ばしてこだはる心なく、こゝめの木僅かに伸びて葉末の明日を待つ。人知らぬ暗き岩かげ、濃き紫に染めて深淵に己が姿を傷む花のあはれさ。岩にしかむで近けば薤の花なり。あはれ小さき身の何の心してかこの惆悵の風にはなびく「薤上の朝露何ぞ晞くことやすき」古の心をこの岩かげに偲ば、千歳悠々として隔つも、生命苦のみは一日の如くに連り、雲關幾重を越ゆるも、人たるもの、哀愁またこの清絶の幽境につながら。傷むで又傷み、怨で又怨む。思を清流に流し、憂を綠山に送つてこの花に手をふれば、清愁の一境

のみ天地のすべてを包むには似る。

さまざまの石みな遊ぶこの潭に命は惜め薙の紫

このけしき名もなき石の一つさへおのが姿を眺めよろこぶ

淵に立つ巖に我を代はらせてこのみごりの水をはなれじ

我が清流は遠くつゞきて紀和の山峽に源を結ぶなるべし。探ぬればはてしなく、遡れば勝絶連りて盡ることなかるべきも、囚はれを我が憂に残し、こゝに踵を返へす。愛着譬ふべきなし。再び雨を被り往路の驚きを繰り返して、大石の墓畔には來ぬ。碑石一つ一つ、すべて命のあとなれば尊し。取り立て、何れをか英哲と呼び聖賢を云はむ。大虚に生を刻み、人間に情念を結び、日出で、耕し日入つて息へる清魂の一つを、誰か無名の骨とし路傍の石に蹴らむとはする。蒼空と白雲との無窮に向つて、何人かよく有名の墓標を築き得るものぞ。無名は天地の初めのみにあらず、人類文化の母胎なるをや。碑の悉くに跪き、碑なきすべてにも亦三界萬靈の偈を思ふ。この地山峽の田圃、一つ一つに石垣を築いて「やぐら」と云ふ。遠く望めば城壁の如し。石の數を讀むさへ盡くるなきを、一つ一つ人の腕をもて運ばれ、形を刻むて積まれたる疲れの跡を思へば暗涙たゞ襟を潤す。暴水の時すべてを流すべかりし山峽の野に今日黄熟の波を見するもの、いかでか無名の勞人が無勳の賜にあらざらむ。一粒の稻そも幾千年に亘る真人が勞苦の蹟になれる。墓石の荒廢は時の流れに託すべし。聖苦と聖行との跡はどこしなへに人たるもの胸宇には刻みつくべし。誰れかこれをゆかめむとはする。思へばはてしなし。

菜根の土をのり出て白々と風に吹かるゝこの山畑

一つぼの糶のこぼれを頂きてすさみ行く世の末をあはれむ

田ぐるくむ「やぐら」の石のこことくあはれ命のあどのかずかず

流に下つて石を拾ふ。形さまま我を誘ふ。對へる岸の斷崖、岩角を蓋にし蜂の巢の大なるをかけた
り。蜜清流に滴らばと掌をつぼめぬ。

岩かごを蓋につりたる山蜂の巢のかけ沈む水を掬ひぬ

ゆくりなく我をいたみぬ時じくに巖をすべる水の心よ

客舎に歸れば故舊の人林君訪ね來つて我を待つ。一昨春別を學舎に告げてよりこのかた、こゝに來つてこの人を見むとは。幽境に來つて舊語を語る。我が半生のよき贈と思へば、魂嬉しさにあまつすゝり泣けるものゝ如し。淋しき心なれども、何れにかよき友を持たざる。世は様々に移るも、これらの里のみぞ、尙芳醇を人の心に醸すと聞きては、惜しまるゝこと、山水の清きに譲らず。清魂は清境を作り純情にしてよく聖地を創む。若し淨心を失はゞこの清冽の山水をいかにせむ。人を惜しみて山を惜しむ山を惜みて又人を惜しむ。

惱み來ば菊など採りてこゝろみに波多瀬の山の齡問ふべし

岩洗ふ水のすべてを我と見て瀬々遊べは秋はてしなし

驛頭車を失ひ、待つ間、闇迫つて暮るゝ思ひに堪へねば筆を取り、僅かに紙を行李の上に展べて別れ難きこの里の人々に殘す。

よき瀧をかこみそばだつ巖をばいくたび撫でゝ別れにはせむ

雨いと、降りしきれば、この旅愁をいかにかせむ。

三

大石の車搖ぎ動き、燈影暗くして文字など見るべきにはあらず。闇の底に息付ける人のけはひを見れば心たゞ曇りに曇る。時移らざるが如く、哀傷又流れざるに似たり。たゞ風雨の響のみはてなし。松坂に來つて我北すべきを、そゝろにも思ひ煩ひて南の車を撰び、鳥羽の港に向ふ。美はしき海を慕ふとは雖も、又はてなき旅愁の遺瀨なかりしはあはれの極みなり。燈火に身をつぼめ、疲れに眼を閉ぢぬ。

旅路來て眼つぶれば白雲の湧くが如くに心かさなる

我が車何處へか行く我知らず人も知り得ずはなたれし旅

窓を打つ滴はげしかるは、海邊の闇を走るなるべし。

旅人の我としななれば杳かなる心芽ばわて我れ志摩に入る

車人の勞に援けられて風雨を凌ぎ、客舎に來つて燈光に我を見出す。廣き家、客無きが如く、座すれば濤聲膝下に吼ゆ。朝に清溪を白雲の間に探り、夕に波浪を風雨の中に聞く。思へば限なき命のあこがれなり。清爽の浴室に塵を流せば、又半宵の憂愁を洗ふべきにも似たり。昨夜の旅亭、飾るに菊を以てせしに、床上今青き蘭を据へたり。かりそめの縁としもは思ほへず。

伊勢の旅一夜は瀧の家に眠り一夜は波の家にふかしぬ

波浪に心を躍らし、風雨に耳を澄まさば、愁想何ぞ盡きむ。昨夜は草履に編まるゝ一錢を惜しみ、今

宵は都のならばしに従つてよき樓上に身を伸す。何ものゝたぐり巻く糸の戯れぞや。はかなきを我に責むべきか。世相のはてしなき絡を物に歎くべきか。泥土にまみれながら、誰かよく一掬の淨水を汲まむ。自ら潔しとするものは己がよるべの濁れるを知らず。世相の系縁を断てりとするものは、生存の機微に徹せず。矛盾線上、はかなくも我が推理を磨いて快明の一斷に生きむとはす。若しよく切らずしむば、遂に我が生の撞着を如何にせむ。生死の岐るゝところ、あはれ遠くにはあらし。思を海水に投せむとすれども、波洗はず。暫く旅愁の静寂を燭光の朗らかさに研ぎ出して、紙を卓上に展げ、筆を拈してこの行の記を案ず。夜徒らに更けたり。

かくばかり悲しくものに歎かむと訪ね來りし海邊ならむや

肱を据ね頭をかゝね蘭燈のかげに思を繰るあはれなり

並び得ぬ二つのものに身をのせて滅び行く日を待てばはかなし

風雨朝に到るも止まず。夙に起きて戸を閉しながら燭を捻じて我が記をつれば、心いと静なり。行を追ひ節を送る。また我が生の源を汲むとも名くべし。朝たけて板戸をくれば、波岸を打ち、風煙雨を吹いて、鳥のかずまたなくあはれなり。悲しさ、沈める我が思には添へり。欄を離るゝこと三步、磯の斷崖に臨むで黄花の潮風に惱める、我が心の深淵に影を落す。

磯に咲く姿をいたみ名を問へば花のつは露秋の雨ふる

海原の嘆きに嘆く雨風をひとりに受けて惱むつは露

旅なれば一つの花の小さきさへ我れうけ容れてしみじみと泣く

住む魚を恐れて磯の蟹さへも逃げ歸るてふ淵に我が立つ
なすべきをなさで躪く我かなと思へば命生きがてにあり

愛執つながるが如きも、又車を求めて遙かに京都を指す。海をつたひ、野を走り、又山に入る、龜山に東して故國に病父を訪はむか、思ひ亂れに亂る。

赤々と烏の枕いろみ來ぬふるさと人のいかにあらむ

車中西山の三子を見出し、旅愁を窓外に放つ。到る處知人あり。嬉しさ限なし。静かに氈帽を探ぐれば、かざせる薙花、尙命を抱く。

水青きかの山峽に摘みて來し薙の紫けふも凋ます

薙花行と名け、我が身一つにこのあはれを偲ぶ。